

<特集:台湾で考える日本文学教育>

「日本文学史」を解体する「日本文学史」の授業は可能か

— 東海大学・慈済大学での試みを例に —

笹沼俊暁

1 はじめに

近年、いくつかの研究があきらかにしているように、近代日本の教育・学術制度における「日本文学」あるいは「国文学」という領域は、明治以降の近代国家建設のための国策学問として出発した側面を強く持つ¹。国民国家および植民地帝国としての「日本」のセルフイメージを形作る備品として、日本文学という領域が形成されたのである。こうした歴史経緯をもつ日本文学を「教える」ことは、かつて日本による植民地支配を受けた台湾では、個々の教師の思惑を離れて、植民地主義の再生産の枠組に無意識のうちに収斂されてしまいかねない。本論では、台湾の大学の日文系の中で構造化された「文学」教育の位置そのものを問い直す授業の可能性を考えたい。ただし、筆者の私自身が慈済大学東方語文学系および東海大学日本語文学系での経験をもとにした、多分に個人的な議論が主となることをあらかじめおことわりしておきたい。

¹ 鈴木貞美『日本の〈文学〉概念』(作品社、一九九八年)、ハルオ・シラネ・鈴木登美編『創造された古典カノン形成・国民国家・日本文学』(新曜社、一九九九年)、品田悦一『万葉集の発明 国民国家と文化装置としての古典』(新曜社、二〇〇一年)、笹沼俊暁『〈国文学〉の思想 — その繁栄と終焉』(学術出版会、二〇〇六年)など。

2 日本表象と「創られた伝統」の視点

私は、日本の大学で日本近代文学専攻の学位取得後、二〇〇六年に台湾東部の花蓮にある慈済大学の東方語文学系で教壇に立つことになった。慈済大学東方語文学系の特徴は、中文組・日文組の合同によって組織が構成され、日文専攻の学生は日本関係の科目ばかりでなく中国関係の授業も一定数履修を義務づけられているというところにある。だがその点を除けば、系の半分を構成する日文組のカリキュラムは、台湾の大学では比較的オーソドックスな日文系のそれを、基本的に踏襲するものといってよい。すなわち、一～二年次では、『みんなの日本語』をベースとした日本語の文法・語彙・会話・読み書きの基礎学習に重点をおき、三～四年次では、引き続き会話や作文の授業を必修として義務づけつつ、日本文学史や中日比較文学、日本語学、日本語教育学などの「専門」の授業を用意するというものである。

そして、この職場でしばらく働くうちに、私は、台湾の「日本語学科」で勤務する「日本人の日本語教師」の多くを共通してとりかこんでいると思われる「空気」を感じるようになった。すなわち、学内の台湾人同僚や地元の一般市民、そして学生たちの多くから、「日本人の代表」として見られ、そのように遇されるという空気である。この空気の中では、私のような日本生まれの日本籍教師は、「日本語」「日本文化」「日本文学」の所有権をいわば「自然」的に占有するものとして扱われる。学生は、私たちを通して「本当の日本語」「本当の日本文化」を「習う」ことを期待するのである。そこでは、日本語・日本文化・日本文学の所有権を「日本人」という民族的・国家的主体の特権物と見なした上での、「学ぶ台湾人」／「教える日本人」という関係性の構造が前提とされている。

私見では、こうした空気は、台湾の大学の日文系全体の成り立ちそのものの根幹にも一部関わっているように思われる。台湾の大学の日文系は、大枠において日本語能力の「基礎」の習得に教育の重点を置いている。そのため台湾人学生が「本格的な勉強」「本格的な研究」をしようと思ったら、多くの場合、卒業後に日本の大学・大学院に留学をするというコースに進むことになる。げんに台湾の大学の日文系で教える台湾人教師のほとんどは日本留学経験をもち、日本の大学院での学位をもつ。日本関係の学問・教育の「本場」はあくまで日本の大学にあり、台湾の大学はいつてみればそのための予備校ということになる。

そして、台湾の大学の日文系の学部教育の雰囲気の中では、学生人気を惹きつけるという経営的な目的もあり、「日本」／「台湾」あるいは「日本」／「中国」という二項対立を前提とし

た上での諸活動がしばしば見受けられる。すなわち、「日本語学科」のホームページ上を、浴衣を着た学生が桜や花火を眺める写真が飾り、キャンパス内では茶道や華道、和太鼓などの「伝統文化」の講習会が催され、日本籍教師は「日本人らしく」「礼儀正しい」態度や「正しくきれいな日本語」を話すことがなんとなく期待される。こうした単一的な日本表象を台湾人学生・教師側が期待し、日本人教師側もまた、そうした期待の地平に応える自己演出を内面化する。

慈済大学東方語文学系で、私は「日本文学史」の授業を担当したわけではなかったが、そのかわり「日本文化」という三年生対象の必修科目を担当することになった。もともと能やお華、神社や和歌俳句のような、いわゆる「伝統的な日本文化」を教えることを期待されて開設された科目である。そして、現代サブカルチャーの紹介などを期待するいわゆる「哈日族」の受講者も多かったように思われる。だが、私はある程度の不評は買ってでも、いわば日文系のオーソドックスともいえる「日本表象の伝授」を避けたいと考えた。日本文化＝日本国家や民族の専有物という図式を前提した日本表象の解体の場として、「日本文化」の授業をおこないたかった。台湾の大学には台湾の大学なりの「日本文化」の考え方があってしかるべきだろう。

以下は、2006 年前期におこなったその授業シラバスの一部である。私自身の専門領域の関係上、近現代の問題に集中してはいるが、いわゆる文学にかかわる問題も含め、政治、思想、文化と多岐にわたる雑多なテーマをあつかった。

- 第1回 「日本」とは何か⁽¹⁾ その領域と成り立ち
- 第2回 「日本」とは何か⁽²⁾ 明治維新と近代日本
- 第3回 近代日本と天皇⁽¹⁾ 巡幸と御真影…近代天皇制と視覚効果
- 第4回 近代日本と天皇⁽²⁾ ヒロヒトとミッチー…大元帥から象徴へ^(前)
- 第5回 近代日本と天皇⁽³⁾ ヒロヒトとミッチー…大元帥から象徴へ^(後)
- 第6回 軍隊と学校の日本⁽¹⁾ 「貴様と俺とは同期の桜～」…戦死者と近代
- 第7回 軍隊と学校の日本⁽²⁾ 身体近代化
- 第8回 「性」と「愛」の日本…「恋愛」の発見
- 第9回 オリエンタリズムの日本…植民地主義と人種偏見
- 第10回 戦後民主主義の日本⁽¹⁾…敗戦後の混乱と理想
- 第11回 戦後民主主義の日本⁽²⁾…ナショナリズムの思想

第12回 高度経済成長と日本…家族制度の変遷

第13回 近代化の終焉…失われた十年と「寂しい国の殺人」

授業の第1回、2回では、まず「日本」という領域の自明性を問いなおすことから始めた。現代の「日本」の国家領域は自明のものとされがちであるが、そもそもそれが国際社会の中で定められたのは第二次世界大戦後のことであり、敗戦以前には台湾や朝鮮半島等も「日本」の中に含まれていた。また第3回から第5回にかけて、「天皇制」を主要な題材としながら、江戸時代以前には「日本」「日本人」という意識すら普遍的なものではなく、「日本語」や「日本文化」という概念もなかった等の、現在の歴史学や文化研究の研究レベルではいわば常識とすらなっている「国民国家論」の基礎知識の確認をおこなった。

そして第6回から第8回にかけては、「学校」「時間感覚」「軍隊」「桜」「忠烈祠」などの題材を例として、日本の近代化と国民国家形成が、今日の台湾に住む私達の環境や身体、感情、感覚までをもある部分形作ってしまっているという問題を考察した。軍隊や学校、医学などの近代的諸制度を通して、国民国家の成員としての身体や意識が管理され、さらに台湾などで植民地支配がおこなわれていく。「恋愛」のような近代的な人間関係や感情の形式すらもまた、同時に流入したという話をした。

ちなみにこの問題を授業であつかうにあたっては、「日本」は、「台湾」の外部にあるたんなる客体や美的表象として考えるべきものではなく、現在の学生たち自身をとりまく環境の中の身近な物事に注意を払うことを通じて考察されるべきという発想が、私の念頭にあった。現代の学生の自分たち自身の問題として、「日本」を考える必要があると考えたのである。幸い花蓮の身近な街や田園には、植民地時代の遺構等が多く残されており、同僚教師との連携により、別の授業の枠内での野外活動を通して、こうした考察を別角度から補完していただくこともできた。第9回では、「オリエンタリズム」の概念について説明した。

そして第10回から最終回までは、戦後日本の思想・文化史の考察を試みた。第二次世界大戦を経て創られた戦後の日本国憲法とその背景、高度経済成長と社会・思想の変化などの問題を扱った。

これは私自身の個人的な主観に過ぎないのかも知れないが、現代の台湾社会では、たとえば李登輝に代表されるような、日本時代の教育を受けた世代の人々が懐古的に語る皇民化

時代の「日本」イメージが影響力をもつことが多い。また、若い世代の台湾人学生にとって、「日本」とは多くの場合、マンガやアニメ、J-POP など現代のサブカルチャーによる、脱歴史化・脱政治化・脱思想化された表象の中でイメージされやすい。もちろん日本統治時代やサブカルチャーの問題は重要であるが、しかし戦後から現代に至るまでどのような道筋を辿ったのかについて、東アジア現代史の歴史的・思想的イメージが欠落しがちな側面があるように思われる。そして「日本」という枠組についての基礎的な理解をおこなおうとするのであれば、憲法の問題の考察は、避けて通るべきでないと考えたのである。

3 作品から入る「日本文学史概論」

慈済大学を退職し東海大学日本語文学系へと遷ってから、私は「日本文学史概論」(二年生の選択科目)を担当することとなった。東海大学日文系では、台湾の大学の日文系のなかでもユニークな特色をいくつも打ち出しており、そのカリキュラム全体の中のどのような位置において「日本文学史」を教えるべきかという課題が発生した。

東海大学の日文系の最大の特徴は、日本語を、コミュニケーションや理解、批判的考察のための「道具」として位置づけている点である。基礎としての日本語の習得に力を注ぐ点では他の日文系の教育手法と変わりはないが、日本語習得それ自体を目標とするのではなく、日本語習得を通して、現実の社会での人間の動きや交流、歴史や思想、メディア等の様々な問題に実際に関わり、また批判的に考察する過程を重視するのである。

そのため、一年生は、『みんなの日本語』を軸とした基礎日本語の授業が多くなるものの、同時に「言語溝通領域概論」「社会領域概論」「文化領域概論」という、日本語を通じてのコミュニケーションや社会問題、文化・表象を考察するための基礎的視点や概念を学ぶカリキュラムを履修する。そして2年生以降から、言語学や歴史学、現代社会論、メディア製作、文学史などの内容的・専門的な科目を多く履修することになる。それらの授業では基本的に使用言語は日本語であり、さらに99年度からは四年生の卒業条件として日本語による專題研究(論文・メディア製作)を必修としている。また教室内授業の他にも、提携関係のある日本の大学や、地域社会やマイノリティー社会などとの、日本語を介した交流活動を多く開催している。

「日本文学史」を解体する「日本文学史」の授業は可能か

これらの取り組みのねらいは、日本語を、たんに日本の国家や民族に本質主義的に帰属するものとしてではなく、台湾の地域社会をふくめた国際的な交通空間の中で、社会や人の動き、思想言論活動等を考察し、また実際にそこに参加していくための道具として捉え直すところにある。経済的・政治的「強者」である日本の国家や民族の所有物としての日本語を、留学や就職のための基礎準備としてのみ受動的に学ぶのではない。むしろ就職や留学の準備としての日本語学習そのものは重要であり、基礎的語学教育は他の日文系と同様に重視する。しかしそれだけではなく、台湾人学生が自らの行動と批判認識の主体を形成するための武器として、日本語を学んで欲しいという願いもそこには込められている。いってみれば、植民地主義の再生産に対する対抗運動として、日本語教育・学習を組み替えていこうとする意図がそこにある。そのため授業や活動ではしばしば、多くの担当教師によって、日本統治時代をはじめ台湾で日本語教育・学習が果たしてきた政治的な役割の原罪性が自己反省的に言及される。

こうした東海大学日本語文学系の全体の特徴の中で、私は新学期の「日本文学史概論」が開始してから数週間は、まず、「創られた伝統」としての「日本文学」の問題について、パワーポイントを使用して講義することになっている。日本で書かれた、あるいはそれを元に台湾で作られた日本文学史の市販の教科書の年表的事項を暗記させるのではなく、「日本文学」や「中国文学」、さらには「台湾文学」などの近代以降の国家や民族の領域を前提とした知の領域の自明性について疑う視点を、学生にまず喚起しておきたいのである。

幸い、私は一年生の必修科目の一つ「文化領域概論」の授業を担当しており、そこでは慈済大学の「日本文化」の授業でおこなった内容の一部を再編成して引き続き講義している。一年生の段階ですでに近代国民国家の構築性に対する基礎的な批判的視線は述べているため、二年生の「日本文学史概論」では、いわばその継続・発展として、日本文学あるいは日本文学史の領域性の批判的検証をおこなう形である。講義では、明治以降に「日本文学」の領域が確立される前の、東アジア全域における普遍的文字文化としての漢字・漢文の存在の意味や、日本列島における訓読、和文脈の発生について概略的に講義する。そして、一般的な日本文学史の教科書の中で日本古典文学の代表として記述されている『万葉集』『竹取物語』『源氏物語』等の作品が、近代以前と以後とで大きく評価のされ方が変化したことについて等に言及する。これは、古典文学の初歩的事項の説明をおこなうという目的をも含めている。そしてま

た、『台湾万葉集』など植民地時代台湾で書かれた日本語作品の存在や、英語、ドイツ語などで創作活動をする日系作家の存在についても言及する。

そしてこの講義の後、実際の作品をいくつか学生に講読・発表・討論してもらっている。このような作品講読・発表・討論の形式による文学史概論の授業は、東海大学日文系ではすでに私の着任以前から、前任者によって長らく行われてきたものである。はじめに既成の文学史の教科書的な知識や抽象概念を演繹的に「与える」のではなく、まず実際の個別の作品を読んでもらい、学生それぞれの主体的な読書体験から考察を出発させるのである。文学史というものは、近代以降のさまざまな政治的・社会的環境の制約の中で、誰かが後付的に創出したストーリーである。個別の作品から出発することで、そうしたストーリーを受動的に享受する態度から距離を置くことができるというのがその考え方の基になっている。

実際の授業では、二週間で一編の作品をあつかう。まず一週目の授業では、その週の課題作品を担当する学生グループが、作品の概要や背景、考察をレジュメにまとめて報告する。そして教室内でグループにわかれて討論をおこない、その後、討論の結果をグループごとに報告する。余った時間で担当教師が簡単な補足説明をおこなう。そして二週目では、作品やその背景にまつわる様々なテーマについて、担当教師が講義をおこなっている。

使用のアンソロジーは、飯田祐子・日高佳紀・日比義高編『文学で考える 〈日本〉とは何か』(双文社出版、2007年)である。目次は以下の通り。

I 〈日本〉をつくる

森鷗外「普請中」／国木田独歩「武蔵野」／太宰治「十二月八日」／コラム「ディスカバー・ニッポン」

II 帝国〈日本〉

中島敦「マリヤン」／牛島春子「祝といふ男」／金鍾漢「幼年」／辻詩海「合唱について」／くらいまつくす／コラム「歴史小説と〈日本〉のアイデンティティ」

III 〈戦後〉を生きる

野坂昭如「火垂るの墓」／小島信夫「アメリカン・スクール」／目取真俊「水滴」／コラム「新国家、樹立？」

IV それぞれの〈日本〉

「日本文学史」を解体する「日本文学史」の授業は可能か

鳩沢佐美夫「証しの空文」／リービ英雄「仲間」／伊藤比呂美「母に連れられて荒れ地に住み着く」

この作品集は、もとより日本国外での外国人学生が対象の教科書として作られたものではなく、日文科の二年生にとっては読むこと自体が一つのチャレンジであるような難易度の高い、あるいは比較的長めの作品もいくつか含まれている。そのため今年度の授業では、鳩沢佐美夫「証しの空文」、リービ英雄「仲間」、伊藤比呂美「母に連れられて荒れ地に住み着く」という比較的長めの三つの作品をカットし、かわりに三島由紀夫「怪物」、村上春樹「中国行きのスロウ・ボート」、島田雅彦「砂漠のイルカ」という三つの短編小説に差し替えて使用している。

このアンソロジーは、「Ⅰ〈日本〉をつくる」では近代国家建設、「Ⅱ 帝国〈日本〉」では植民地問題、「Ⅲ〈戦後〉を生きる」では戦争と占領の記憶というように、たんなる「文学の授業」ではなく、作品をとおして歴史、政治、社会、文化など広く多領域にわたる学際的な問題を考えるきっかけを与えようとするところに特徴がある。

また、日本近代文学の典型的作品としてはかならずしも一般的にイメージされていない作品を多く含んでいる。たとえば「マリヤン」「祝といふ男」「水滴」など、南洋、満州、沖縄のようないわゆる「外地」「植民地」を舞台とした作品を含んでいる。マイノリティーに対する視点を確保しつつ、文学作品をとおして「日本」という枠組を問いなおすことが、編集意図として込められている。また、「普請中」「武蔵野」は、構築された制度としての「日本」あるいは「日本近代文学」についての、批判的視点を養うきっかけを期待して挿入されたものといえるだろう。私自身が慈済大学時代におこなった「日本文化」の授業の目論見の延長として、かつまた東海大学日文科全体を規定する、国民国家や植民地主義の脱構築という方向性をささえる一つとして、「日本文学史概論」を展開することができる構成となっているのである。

4 おわりに

以上、慈済大学および東海大学で私がこれまでにおこなった「日本文化」および「日本文学史概論」の具体例をとおし、台湾での「日本表象」の解体の可能性について検討した。もっとも、ここで提示したものは、あくまで理念であり、現実の授業の現場で、学生側が十分にこちらの狙

いを理解してくれたかどうかは別問題である。討論がスムーズに進まなかったり、学年と講読作品の難易度設定のかねあいなど、教室内運営においてうまくいかないところが多々あった。今後の課題としたい。

「日本文化」および「日本文学史概論」の二つの授業を通して私が念頭においていたのは、小説や詩など狭義の意味のみではなく、より広く学際的な視野から「文学」をとらえるべきという発想である。そのため慈済大学でおこなった「日本文化」の授業は、表面的な名前こそ「文学」ではないが、私の念頭の中では、「文学教育」そのものである。学术界における研究では、小説や詩などの「純粹」な文学研究に対して、より学際的な文化研究の方法が模索され、「近代文学の終焉」すら議論される現代において、大学における「文学教育」の位置そのものも考え直してよいのかもしれない。

小説や詩を主体としてあらかじめ「カノン」として定められた日本文学の「文化性」「教養性」を台湾人学生に教え込む、という一方的な図式のみを「文学教育」とするのではなく、より広義な意味で「文学教育」をとらえなおす必要がある。たとえば、東海大学をふくめ、多くの台湾の大学の日文系では、日本語による演劇の創作や上演活動が行われている。あらかじめ「カノン」として定められた小説や詩を受け身の形で「学ぶ」形だけではなく、このような形で「自ら発信する」活動もまた、広義の意味での「文学教育」として捉え直すべきであろう。日本語による雑誌の企画・編集・発行や、ドキュメンタリー映画の創作・上演などのメディア・社会活動、そして会話の授業での様々なコミュニケーション練習など、一般的に「語学教育」と目されるものもまた、広い意味で「文学教育」の一つとして位置づけるべきと思われる。

もともと「文学」という言葉は、詩や小説のみを指す言葉ではなく、学問や文化の総体を現わすものとして使われていた。そして詩歌など多くの文学ジャンルは、たんに受動的に「読む」だけのものとしてではなく、双方向的なコミュニケーションの手段として発達したものである。その意味では、「日本語教育」「文学教育」の相違を、本質的なものとして見る必要はないだろう。いわゆる「語学の授業」は同時に「中身に関する授業」でもありうるのである。

日本文学のいわゆる代表的な作品を読むことは、むしろ重要なことである。だが、与えられた特定の「カノン」を教え込む一方的な行為としてのみではなく、現代の社会環境の中での、批評的、批判的な主体性を育む営為の総体として、「文学教育」を捉え直す必要があると考えられる。言語・文化・政治・経済など多様な要素が絡まり合い、多くの異質な人々が移動し交流し、

「日本文学史」を解体する「日本文学史」の授業は可能か

物事の変化のスピードの速い流動的な現代社会だからこそ、そうした試みが必要であるように思われる。

(Sasanuma Toshiaki 東海大学日本語文学系)